

乙吉だるま

訳 村 松 眞 一
(静岡大学名誉教授)

うちの子供たちは大喜びである。昨夜はだいぶ雪が降って、日本の詩人たちが、いみじくもそう呼んでいる「銀世界」をこしらえてくれたからである。まったく、この国の詩人が冬を讚美した言葉には、何の誇張の嫌いもない。日本の冬はまことに美しい―ゆめのように美しいのである。それは、「自然の死」について何ら憂鬱な想像をかき立てはしない―大寒の季節でさえ、自然は目に見えて生き生きとしているからである。

それは、我々のいわゆる「骸骨の森」の光景によって、審美的な眼を悩ますこともない。なぜなら、森は大部分常緑樹だからである。そして雪は―とがった松葉の上にふんわりと積ったり、竹にしばらくの間重みをかけて、美しくしなわせたりするが―極東の詩人に、ふと陰惨な経帷子を連想させることは、まったくくない。実際、日本の冬の類い魅力は―想像もできない異様な形をなして、森や常緑の樹々の上に降り積もる、この雪によるのである。

今朝、うちの二人の書生光あきと新見は、雪だるまを作って子供たちを喜ばせていた。私もそれを眺めて大いに楽しんだ。雪だるまの作り方は、古来の簡単なものである。初めに巨大な雪の球を一つ作りあげる。なるべく直径3、4フィートくらいのもの。これが座っているだるまの胴体になる。次に直径2フィートくらいのも、少し小さい雪の球を一つ作って、だるまの頭にする。そしてこの小さい球を大きい玉の上に乗せ、両方の下の部分のまわりに雪をつめて、その場に固定するようにする。二つの丸いたどんを使ってだるまの目玉を作り、また同じ材料のかけら2、3個があれば、だるまの鼻と口を表すことができる。最後に、だるまの大きなおなかに凹みを掘ってお臍とし、中に蠟燭を立てて火をとます。その灯の熱で、凹みは次第に大きくなってゆく……。

だが、私は雪だるまという言葉の説明を忘れた。「だるま」は菩提達磨ぼだいだるまという名の略称、梵語「ボーディダルマ」の日本語訳である。では、「ボーディダルマ」とは誰か？

ボーディダルマは、ボーディタラとも言い、大迦葉から続く第28代目の仏教の祖師である。彼が仏教の伝道者として中国へ渡ったのは梁王朝の元年〔西暦520年〕、その地で禪宗という宗派を開いた。この宗派の教義は「以心伝心」、つまり書いたり話したりする言葉によらずに、思うことを伝えるという教義である。南條文雄教授は、その著『仏教十二宗派の歴史』のなかで、こういわれる―「大乘及び小乗のあらゆる教義のほかに、秘密の教義を伝える別の一派があり、それはいかなる言葉の使用にも依存しない。この派の教義によれば、人は自らの思想によって、直接仏陀の思想すなわち仏性への、いわゆる鍵を見ることが出来る。」

禅の教義の伝統というものも変わっている。仏陀が靈鷲山りょうじゆせんの頂きで説教をされていた時、急に彼の前面に大梵天王が現われ、仏陀に金色の花を捧げて、法

を説くように懇願した。仏陀は、その極楽の花を受けとられ、手に持たれた。が一言もおつしやらない。そこで、会衆は仏陀の沈黙を何事かと訝いぶかった。しかし迦葉尊者だけは、にっこりと微笑ほほえんだ。すると、仏陀は迦葉尊者に向かい申された―「我に正法眼蔵涅槃妙心あり、今汝に与うべし」と。こうして以心伝心で、その教義は迦葉に伝えられた。そしてまた以心伝心で迦葉はそれを阿難陀に伝えた。その後も以心伝心で、教義は祖師から祖師へと、達磨大師の時代まで伝えられ、達磨大師は、後継者であるその宗派の二代目の祖師に、それを伝えた。ある筆者によれば、達磨大師は、かつて日本を訪れたと言う。しかし、この説には根拠がなさそうである。いずれにせよ、禅の教義は、8世紀以前には、日本に伝わっていない。

ところで、だるまについての数ある言い伝えの中で、最も有名なものは、だるまが9年間、絶え間なく座禅をしつづけて、その間に足が落ちてしまったという話である。それ故、だるまの像には足がついていない。

たしかに、達磨に敬意を払うべき点が多い。しかし、極東の芸術家やおもちやを作る職人たちは、彼らのユーモアの感覚―だるまの足が落ちてしまったという話から、元来起こったに違いないユーモアの感覚を、そのために少しでも押さえるようなことはしなかった。何世紀の間、達磨大師にまつわるこの伝説上の不幸は、滑稽な絵、滑稽な彫刻の題材とされている。そして、日本の子供たちは、代々おもちやのだるままで遊んでいる。この小さなおもちやのだるまは、どんなに投げ出されようと、またぼこんと起き上がり、座っているように考案されたものである。今なお人気のあるこのおもちやは、「起き上がり小法師」と呼ばれるが、同じ原理で作られた「不倒翁」と呼ばれる中国のおもちやを、元来真似たか、作り変えたものかもしれない。十四世紀に作られた「饅頭食」という日本の狂言の中にも、起き上がり小法師についての言及がある。しかし、もっと初期の、このおもちやの形は、だるまを象かたどつたものとは思われない。だが一方、十七世紀に起源をもつ童うたがあり、だるまのおもちやが200年以上昔に、一般に知られていたことがわかるのである。

一ひに二ふに

ふんだん達磨が

赤いずきんかぶり すんまいた

「1回、2回：いつも赤頭巾かぶつただるまさん、むとんちやくにまた座る。」このかわいい童うたから察せられるのは、だるまのおもちやの形は、十七世紀以来あまり変わっていないということである。だるまは今なお頭巾をつけ、そして今なお、顔を赤く全身を赤く塗られている。

すでに述べた雪だるまと、(普通張り子でできた)おもちやのだるまの他に、滑稽なだるまの種類は無数にある。ほとんどあらゆる素材を使って、形成したり彫ったりして作られ、大きさは、財布の留め金用の、長さ半インチ位の小さい金属製のだるまから、高さ2、3フィートの、日本の煙草屋が看板代わりに

使っている大きな木製のだるままである……こんなわけで、畏れ多くも、日本の民俗芸術は、達磨大師の9年間の座禅という尊い伝説を、笑いものにしてるのである。

II

ところで、わが家の庭のあの雪だるまで思い出すのは、私が数年前みつけた大変珍しいだるまのこと、楽しいひと夏を過ごした日本の東海岸の、ある漁村でのことであった。その土地には宿屋はなかった。しかし、乙吉という呼ぶ好人物が、魚屋を営み、その家の二階をいつも使わせてくれて、変わった種々様々な魚料理を食べさせてくれたのである。

ある朝、彼は私を店へ呼び入れて、すばらしいホウボウ（魴鱈）を見せてくれた……読者は、何かホウボウに似たものを御覧になったことがあるかどうか。それは巨大な蝶か蛾にそっくりで、よく調べてみると、それが昆虫ではなく――カナガシラ的一种だと確かめられないくらいである。羽根のように対になった4枚のヒレがついていて、上の一對は黒く、空色の明るい斑点があり、下の一對は深紅である。この魚には、また蝶みたいな足、それを使つてすばやく走りまわる細い足があるように見える……

「それ、食べられるかね」と私は聞いた。

「へい！」と乙吉は答えた。「これを先生さまの御食事につけましょう。」

「どんな質問に対しても――否定の答えを要する質問でさえ――乙吉の返事は、まづ感嘆詞「へい！」で始まる。それが、いかにも共感と善意の調子で言われるので、聞く方にこの世のあらゆる苦を、忘れさせてくれるほどである。」

それから私は、ぶらりぶらりと店の奥へと引きかえしながら、色々なものを眺めた。片側には何列も棚が並んでいて、魚の干物が入った箱や、海草の包みや、わらじの束、それに酒を入れる瓢ひょうやラムネの瓶までのせてある。その向かい側の高い所には、カミダナ、つまり神々を祀る棚まつが見えた。そしてそのカミダナの下に目にとまったのが、それより小さい棚と、その上にのせた赤いだるまであった。明らかに、このだるまはおもちやではなかった。その前にお供えがあったからである。だるまが家の神様として祀られているのを見ても、私は別に驚きはしなかった。日本の各地で、天然痘にかかった子供のために、だるまに願をかけることを知っていたからである。私がむしろ驚いたのは、乙吉のだるまが片目であるという、その変った様子であった。大きなこわい目が一つ、大きなフクロウの目のように、店の暗がりの中をギロツと睨にらんでいるように思われた。それは右の目で、つやのある紙でできていた。左目の穴のところは、何もない空白であった。

そこで私は乙吉に声をかけた。

「乙吉さん！子供たちが、だるまさまの左目をたたき出したのですか。」

「へい、へい、」と乙吉は私の気持ちを察して含み笑いをすると、とびきり上等の鯉をまいた組板の上に持ち上げた。「もとから左目はなかったです。」

「そのようにできていたのかね」と私は聞いた。

「へい」と乙吉は、鯉の銀色の胴の中に、長い包丁を音もなく引きながら答えた。「このあたりの人は、盲のだるましかつくりませんです。私があのだるまを買った時は、目は何もついていませんでした。去年私が右の目を入れてやりました。大漁があった日の後にです。」

「けれど、どうして両目とも入れてやらなかったのかね」と私はたずねた。「片目ではいかにもかわいそうだが。」

「へい、へい」と乙吉は、ガラスの簾の上に、手際よく紅と銀色の皮つき刺身を並べながら答えた。「こんど大吉の日がありましたら、その時に、もう片方の目も入れてやります。」

それから、私は村の通りを出歩いて、あちこちの家や店の中をのぞいてみた。そして、異なる発展段階にある他の色々なだるまを発見した―まったく目のないもの、片目だけのもの、そして両目そろっているもの。思い出したのは、出雲で、とくに布袋ほていが―あの太鼓腹をした福の神が、施した恵みに対して、実際によくお札を受けていたことである。信心している者が、感謝する理由を見つめるや否や、横に凭れた布袋の像は、柔らかい布団の上に置かれる。そして一つお恵みが授かる毎に、もう一枚座布団が加えられるのである。しかし気がついてみると、だるまに二つ以上の目はあげられない。三つあげたら三つ目小僧というお化けになってしまう。聞いてみてわかったのだが、だるまに両目が贈られ、また小さなお供えがあげられると、そのだるまは片づけられて、目のない後継者に席をゆずるのである。盲のだるまは、目を入れてもらうために頑張らねばならないから、不思議な恵みを授けると思われているのである。

こういうおかしい小さい神々が、日本にはたくさんある―その数は大変なもので、それについて述べようとすれば、一冊の大著が必要になるであろう。そして、この変な小さい神々を崇めている人たちは、そのほとんどがこちらがいたく感動するほど正直であることを知った。実際、私自身の経験では、神が素朴であればあるほど、それを崇める人は、それだけ正直である、と信じてよいであろう。もつとも、読者が性急な結論を引き出すことは、私の望むところではない。例えば、正直の極致は神が消滅する点に始まる、などというつもりはない。ただ、こういうことだけは、あえて述べておきたいのである。つまり、至って小さい神々、おもちゃのような神々を信仰することは、素朴な心の持ち主でなければできないことで、こういう素朴な心は、邪悪なこの世においては、純な善良さに最も近いものである。

私が村を発つ前の晩、乙吉は勘定書を届け、2か月分のご馳走代をつけてきた。そしてその金額は、どう考えても少ないものであった。もちろん、思いや

りのある日本の習慣によって、心づけが期待されてはいた。がその事実を考慮してもなお、そのお勘定は馬鹿々々しいほど正直なものであった。あれこれお世話になったお礼の気持ちを表すために、せめて私にできることは、その金額を2倍にしてあげることであった。すると乙吉の満足げな、その様子は、まったく自然で、しかも品位の具わったものであっただけに、見ていて何とも言えぬ美しさがあった。

翌朝、私は早い急行列車に乗るために、三時半に起きて着替えをした。しかし未明のそんな時刻でも、階下には温かい朝食が用意されていて、乙吉の日焼けした小さい娘が、給仕するばかりにひかえていた・・・最後に熱いお茶を一杯飲みおえたとき、私は何げなく、まだ小さいと灯明のともっている神棚のほうを見やった。するとだるまの前にも灯あかりがともっている。それに気づくのと、ほとんど同時に、私の目にとまったのは、だるまがじっと私を直視していることであった。―ちやんと二つの目を入れてもらって―